中国海軍ニュース：**中国国産空母の設計図凍結**

漢和防務評論 20140625（抄訳）

阿部信行

（訳者コメント）

中国国産空母第1号の設計図が確定したとの漢和防務評論の記事を紹介します。中国は、旧ソ連空母ワリヤーグのスクラップを復元し、中国空母”遼寧”として現在艦載機の運用を含めて実験中ですが、正真正銘の**中国国産空母も旧ソ連空母ワリヤーグを原型にしている**ようです。そうでないと、こんなに早く国産空母の建造に着手できるはずがありません。

国産空母建造に際しては、**ウクライナの支援協力があった**ことが証明されました。また国産空母第2号の建造も並行して進められており、両艦の建造の時間的なずれが少ないということです。2艘を並行して建造するのは、資金的な余裕があるからというよりも、**日米に対抗するため、空母の戦力化を急いでいる**ためであると思います。

しかしこれは**中国にとってリスクが大きい事業**であると思います。**国産空母自体が極めて旧式であるから**です。スクラップを修復してスクラップを造ることにならなければ良いのですが。

KDR 北京 JUHN CHANG 特電：

この五月、中国の消息筋は KDR に対し次のように述べた：中国の国産空母第1号の設計図は、若干修正された後、現在最終確定段階にある。いわゆる“設計図凍結”とは設計図の完成を指し、もはや技術上大きな修正が加えられることはない。”設計図凍結”の次は“発図”であり、設計図は工場に送られる。これは、中国の空母建造プロジェクトのスケジュール表ができたことを意味する。空母設計の全体図は北方造船重工第 701 所が担当した。中国の権威筋は：彼らは、旧ソ連空母ワリヤーグの不完全な設計図を入手したと述べた。補足説明すると、ウクライナの NIKOLAEV 南造船所が保有する空母ワリヤーグの設計図は通常“南方設計図”と呼ばれ、一方の“北方設計図”はサンクトペテルブルグの NIEVSKY 船舶設計局が保管している。ソ連時代、ウクライナで製造される全ての装備系統には一般に 2 つの設計図が作られた。中国海軍は、相当多数のソ連時代の“南方設計図”を獲得している。その中には各種艦載レーダー、ソナー、T-10K (J-15) 艦載機の設計図が含まれる。

この情報について、2013 年から本誌記者は、ロシア及びウクライナの造船工業界に取材し、フランス、イタリア、ドイツの大型軍用船舶を設計した経験のある設計師の協力を得て確認したところ、次の結論を得た。この結論は本誌大衆

版が初めて公開するものである。
ウクライナ国家特殊装備輸出入総局中国担当部局に取材した。同部局は、ウクライナと中国の全ての軍事協力事業を担当している。同部局の長は、若くて有為な ANDROSOV 氏で､彼は中国空母に関して本誌に次のように述べた:私は、再度責任を持って貴誌に伝える。我々の会社は、未だかって中国国産空母の設計、建造に関わったことはない。これは彼ら（中国）の国家秘密事業であり、我々が関与できるはずがない、と。

ANDROSOV 氏との質疑応答内容
KDR :（中国国産空母の建造に）間接的な関与も無かったのか？我々は、貴方の部局が中国空母事業に関わるため、担当グループを設立したと聞いているが？

ANDROSOV 氏：再び繰り返すが、我々は中国空母の設計、製造に直接関与したことはない。また中国に空母ワリヤーグの設計図を提供したことはない。中国との軍事協力に関して、一部の事業で確かに中国からの質問に意見を述べたことはあった。しかし単に意見を述べただけである。

それで分かった。KDR は次のように理解した。ANDROSOV 氏は、中国からの質問に対するウクライナ側の意見が空母に関するものであったかどうかは直接説明してはいない。しかし ZORYA-MASHPROJECT 機械製造工場の指導者たちは何度も KDR の取材を受けた際に、中国空母の動力系統に関する質問に対し、自己の意見を述べたことを証言した。しかも一度だけではなかった。
したがって、ウクライナが、中国空母の建造に関し質問に答える形で意見を述べたとする説明は、Y-20 輸送機、WZ-10 ヘリに関しても共通すると考える。すなわち中国がウクライナに対し、空母の一部の重要技術、特に動力の配置技術についてウクライナに意見を求め、或いは設計案の提供まで要求したことを意味し、その後に中国が自ら全ての設計図を完成させ、実験したものであろう。当然製造は、中国が自ら行った。WZ-10 ヘリ及び Y-20 輸送機がワリヤーグと異なるところは、両機種の機体全体の設計図が KAMOV 及び ANTONOV の両設計局から中国に渡されたことである。しかし中国空母に関しては、ウクライナが中国の求めに応じ、部分的な設計に関する意見を提供しただけであった可能性がある。その主なものは動力系統に関してである。
KDR は､”ワリヤーグ/遼寧”が使用する KVG-4 型ボイラー及び蒸気タービンは、MAKAROV 海軍大将船舶大学及び CHERNOMORETS 中央設計局の聯合設計であり、これらの設計資料はすでにハルビンボイラー工場に輸出されたと報道した。

最近得られた”設計図凍結”の情報は、間もなく建造が開始される最初の国産空母第 1 号の設計図が確定したことを意味する。もし今年の”遼寧”号の中期修理過程で新たな技術的問題が発見されなければ、の話であるが。
また KDR は、江南長興島造船所の空母建造準備が停頓していないことを発見した。したがって KDR が出した結論は：2 艘の中国国産空母の建造間隔は接近している可能性があるということだ。現在、観察を要することは、第 1 艘目の空母と 2 艘目の空母の動力系統が完全に同じかどうかである。
2013 年から、空母”遼寧”は多くの内部写真を公開している。女性兵士、兵員室内部、格納庫等の写真である。これらの写真は、各国の専門家によって収集され分析された結果、次のことが分かった。元のワリヤーグの兵員室と新しい”遼寧”の兵員室を比較すると、より人間性が重視されているようだ。女性兵士のベットは 2 段ベットである。欧米の空母の兵員室のベットは 3 段ベットもある。（ここで判断を誤る可能性がある。その理由は、公開された兵員室の等級を区分出来なかったからである。”遼寧”は男性兵員室の写真を公表していない。）
”遼寧”の食堂は相当広い。元のワリヤーグよりも少し広いようだ。このことは、中国国産空母の兵員及びパイロットの人数がワリヤーグよりも相当多く、或いははるかに多いことを意味する。しかし”遼寧”は各種ミサイル発射部隊を載せていない。このことから推測すると、第 1 艘目の国産空母は、ワリヤーグに比べ、より多くの J-15 艦載機を搭載できる可能性がある。もし平時編制が 24 機ならば、一旦需要があれば、24＋12 機に増やすことが出来るかどうか？注意する必要がある。格納庫は相当大きく、しかも照明設備が優れている。このことは”遼寧”が元のワリヤーグよりも多くの艦載機を搭載できることを証明している。
洗濯室は相当広い。中国の艦船設計は伝統的に洗濯室の設計を重視してこなかった。本誌記者が乗艦したことがあるパキスタン海軍に輸出された F-22P 型ミサイル護衛艦の洗濯室は相当狭かった。4 台の乾燥機は艦を受領してから 3 ヶ月も経たずに 4 台とも壊れた。しかし”遼寧”艦には大型の洗濯機がある。
もう一つの見方は次の通りである：確かに”遼寧”の内部は RE-PROGRAMMING（完全な再設計、艤装）がなされているが、船室の基本配置はワリヤーグの構造のままであり、このことは、中国が元の設計図を基礎にして基本構造をさわらず、構造を大きくは変化させなかったことを意味する。
”遼寧”と国産空母第 1 号の設計図の関係を見ると、国産第 1 号の基本設計は、レーダーや搭載武器配置によって発生する部分的変更個所を除き、”遼寧”を原型としているはずである。したがってこの 2 艘の空母の設計図は、海上試験の結果、部分的変更はあるとしても、全体構造が基本的に同じはずである。
以上